ヴィルディユ夫人の小説に見る 17世紀フランス演劇
——真と偽の修辞学——

秋 山 伸 子

変装のテーマはシェイクスピアの時代の英国演劇や黄金世紀におけるスペイン演劇を特徴づけるものであって，17世紀フランス演劇はこのテーマから最も遠いところにあると，長いあいだ信じられてきた。ところが，このテーマは実は17世紀フランス演劇の核を成すといってよいほど重要であることが今では広く知られている。この契機となったのはいうまでもなく，G. フォレスティエの研究『1550年から1680年のフランス演劇における自己同一性の美学——変装とその変形——』(1988年) である。フォレスティエは変装のテーマをありとあらゆる角度から検証しているが，ここで我々が問題にするのは，Cl. ボワイエの戯曲『オロパスト——あるいは偽トナクサール』(1662年) が提起しているような，真と偽の問題なのである。

I.『オロパスト——あるいは偽トナクサール』

フォレスティエは，きわめて多面的な視点から変装のテーマの分析を行っている。彼によれば変装のテーマは，意識的なものとそうでないものとの二つに大別できるばかりではない。衣装などの外面的な要素に頼るものと，こうした要素にほとんど依存することなくもっぱら台詞の力によるものという対立関係に注目した分類の仕方もまた可能なのである。ところで，衣装の変化といった視覚的な要素を廃し，台詞だけに依存するようなものを「変装」のテーマと呼べるのだろうか。こうした疑問を制するかのように，フォレスティエは自らの立場を明らかにしている。

> 外見的な変化を伴う伴わないにかかわらず，またその人物が自分が「変装」していることに気付いているにしても，あるいは逆に自分が演じている人物であると思いこんでいるにしても，借り物の身分を纏うことでそれまでの身分が一時的にしろ中断されるような場合についてはすべてこれを変装と呼ぶことにしよう[1)]。

ボワイエの『オロパスト』は台詞のみに頼る「変装」が中心に据えられた戯曲である。「変装のテーマをもつ17世紀［フランス］悲劇のうちでも最も重要なもの[2)]」のひとつであるこの作品

のあらすじをまず紹介しておこう。

ペルシャ王カンビーズは，自分の兄弟トナクサールに王位を奪われるであろうという夢を見て恐れ，これを未然に防ぐため，トナクサールの暗殺を企てる。暗殺は成功したが，その混乱に乗じて，トナクサールに瓜二つの貴族オロパストがトナクサールとしてバクトルの王位につく。トナクサール戴冠の知らせを受けたカンビーズは動揺し，誤って自らを傷付け，それがもとで死んでしまう。カンビーズの死によってトナクサール（実はオロパスト）はペルシャの王位も手に入れる。ここまでが，この戯曲が始まるまでに起こったことであり，すべて登場人物の語りのなかで説明される。幕が開いたとき，トナクサールは実は彼によく似たオロパストではないのかという疑いが登場人物のあいだに生まれている。トナクサールが嫌悪していたはずのパティジット（オロパストの兄弟）が突然寵臣となったこともこの疑いを裏付けるものに思われる。この偽トナクサールはさらに，実の妹であるはずのエジオンヌに求婚することで，エジオンヌの疑惑を確定的なものとして，彼女の婚約者ダリが率いる兵士たちによって暗殺される。

この作品は，1662年11月17日から12月19日までのあいだ15回連続でパレ・ロワイヤル座の舞台においてモリエールの劇団によって上演された。フォレスティエの言うように，この戯曲はまずまずの当りを取ったといえる。王と瓜二つの人物が王位を奪い取るというこの同じテーマは，すぐさまキノーによって取り上げられる。『アルブの王アグリッパ，あるいは偽ティベリヌス』が競合するオテル・ドゥ・ブルゴーニュ座にかけられ，こちらはボワイエの戯曲を上回る成功を収めることになる。『オロパスト』が主人公の死によって悲劇のうちに終わるのに対して，『アグリッパ』はこれとは対照的に，主人公は愛する女も王冠も手に入れるという幸福な結末を迎える[3)]。

Ⅱ.『ドン・セバスティアン』

ヴィルディユ夫人は，1662年オテル・ドゥ・ブルゴーニュ座で『マンリウス・トルカテュス』を発表し，1665年4月には『寵臣』をパレ・ロワイヤル座の舞台にかけることになるが，彼女が1670年に発表した『恋の暦』を彩る物語のうちのひとつ『ドン・セバスティアン』にもまた，『オロパスト』のテーマの変奏が見られる。この物語を要約すると以下のようになる。

ポルトガル王ドン・セバスティアンはアフリカに遠征した折にモロッコ王の娘クセリーヌ姫への恋に落ちる。二人の幸せも束の間，ドン・セバスティアンは戦死してしまう。恋人の死を知らされたクセリーヌは戦場に赴き，愛する人の亡骸のそばで自害しようとする。ところがまさにその時，死んだと思っていたドン・セバスティアンの瞼が開いたことで，彼が生きていることが分かる。クセリーヌの手厚い看護のおかげでこの男は一命を取り留める。ところでこの男，実はドン・セバスティアンそっくりの別人だったのである。クセリーヌの話から，自分がポルトガル王

と間違われていることを知ったこの男は，ドン・セバスティアンになりすます。いっぽうポルトガルでは，ドン・セバスティアン戦死の知らせを受けて，新しい王が誕生した。そこでしかるべき時期がくるまでのあいだ，ドン・セバスティアンが存命であることを伏せておいて，クセリーヌとの結婚が取り決められた。あれほど望んだ姫との結婚であったのに，この偽ドン・セバスティアンは，モロッコの王位だけでは満足できなくなって，ポルトガルの王位奪還のため，クセリーヌを置き去りにして，パルム公妃（ドン・セバスティアンの婚約者）のもとに行き，彼女の前で，ドン・セバスティアンの役を演じる。公妃は議会に報告し，この元婚約者に対する王位の返還を求める。ところが，公妃はクセリーヌとドン・セバスティアンが結婚していることを知り，ドン・セバスティアンと名乗っている男は偽者であると告発する。抗戦むなしく捕らえられ投獄された偽ドン・セバスティアンは，クセリーヌをないがしろにしたことを後悔し，牢獄を訪れたクセリーヌに謝罪する。すべてを赦すというクセリーヌの腕のなかで偽ドン・セバスティアンは息絶える。

フォレスティエによれば，この時代のフランス演劇においては，変装は成功することを前提として行われるだけではない。「主人公については，その変装が失敗に終わることはほとんどない[4)]」のである。この指摘と照らし合わせてみると，ヴィルディユ夫人が『アグリッパ』の楽観的な結末ではなく，『オロパスト』の悲劇的結末を選んだことの重要性が浮かび上がってくる。もっとも，恋愛の空しさを描き続けた夫人にしてみれば，この選択は当然のことかもしれない。さらには，『ドン・セバスティアン』を『オロパスト』と比較対照することで，ヴィルディユ夫人の小説美学の一端を垣間見ることができるばかりでなく，この時代の小説と演劇の技法の違いといったようなものを浮き彫りにすることさえも可能にならないだろうか。

Ⅲ.『オロパスト』と『ドン・セバスティアン』

一見したところ，変装のテーマはこれら二つの作品の根底を成すものであるように思われる。オロパストはトナクサールとして振舞ううちに，この人物になりきってしまうのである。

Oropaste : [...]
Assis dessus le Trône, orné d'un Diadème,
Je me sens élever au dessus de moi-même.
[...]
Je ne suis plus le faux, mais le vrai Tonaxare,
Je soutiens tout l'éclat d'un mérite si rare,
Et comme de son nom je me sens revêtu,
De toute sa grandeur, de toute sa vertu.
Après m'avoir donné toute sa ressemblance,

Vous auriez tort, grands Dieux, de m'ôter sa puissance ;
Pour remplir mon destin, je me veux oublier,
Et je veux être Roi pour vous justifier.
Sous l'ombre d'un si noble et si beau caractère,
Ai-je encor quelque trait qui te marque ton Frère?
Suis-je pas Roi de Perse?

(*Oropaste*[5], II,5, p.37)

王冠を頂き王座に抱かれ，私は自分を越えた存在になっていく気がする。[.....] もはや私は偽トナクサールではない。私こそ本物のトナクサールなのだ。あの稀に見る人格の輝きすべてを支えるだけの器量が私にはある。トナクサールの名を身に纏うことで，その偉大さ，美徳のすべてが我が身に備わったように思えるのだ。偉大なる神々よ，トナクサールとそっくりにこの身を造っておきながら，その権力を私に与えないのは間違っている。私は自らの宿命を成就するため，自分が自分であることを忘れて王となり，神々の気紛れを正当化するのだ。これほど高貴で素晴らしい気質の宿るこの身のうちにおまえの兄弟［オロパスト］の面影がまだ残っているとでも言うのか。私こそペルシャ王トナクサールではないか。 (『オロパスト』二幕五場)

ヴィルディユ夫人の物語において，偽ドン・セバスティアンの台詞は一見したところ，自分が演じている役にこの人物が一体化していくありさまを描き出すもののようであり，前掲のオロパストの台詞を思わせる。ポルトガルの王位を奪還するために旅立とうとする偽ドン・セバスティアンを何とか引き留めようとするクセリーヌに対して，この人物はまるで本物のドン・セバスティアンであるかのように，腹を立てるのである。

Quoi! Madame, disait le faux Monarque, vous croyez qu'il soit possible à un Prince né pour régner, et qui a goûté les douceurs d'une puissance absolue, de passer sa vie en homme privé? Ah! Madame, vous n'avez pas considéré ce que c'est que d'être Roi, [...]

(*Les Annales galantes*, p.490)

何ということ！と偽国王は言う。国を統べるべく生まれ，君主として絶対権力の甘美な魅力を知ってしまったあとで，一私人として生きてゆくことができるなどとあなたはお考えなのですか。あなたには王であるということがどんなことなのかお分かりでないのです［.....］ (『恋の暦』)

ボワイエの戯曲においては，自らがトナクサールであることをオロパストが周りの人々に次から次へと認めさせていく過程がこの作品全体の牽引力となっているといえる。偽トナクサールは実の妹であるはずのエジオンヌに対する愛を思わず口にしてしまい，彼女の疑惑を呼び起こす。

le Roi : Mais si brûlant d'amour...
Hésione : Que dites-vous, Seigneur?
le Roi : J'avais presque oublié que vous étiez ma Sœur,
Et dans l'emportement d'un si tendre langage....
Adieu, peut-être un jour j'en dirai davantage.
Hésione : Tu m'en as dit assez pour me combler d'effroi ;
Suivons, et découvrons tout ce que je prévois.

(*Oropaste*, I,4, p.18)

王「おまえに対する愛の炎でこの身はこれほどまでに焦がれているというのに.....」
エジオンヌ「何をおっしゃるのです。」
王「おまえが私の妹であることをうっかり忘れるところであった。おまえに対する愛情を表現しようとするあまりつい言葉が過ぎてしまった。それではまた。この話はまた改めて。」
エジオンヌ「何と恐ろしい。今の言葉で十分すぎるくらい。王の後を追いかけてこの恐ろしい真相をつきとめねば。」 (『オロパスト』一幕四場)

こうしてエジオンヌは，王位についているのは実はオロパストではないかとの疑いを抱き始めるのだが，またいっぽうで，実の妹への愛を打ち明けるというこの大胆さこそ，目の前の人物がトナクサールであるという何よりの証拠ではないのかとも思う（三幕五場）。そして四幕四場では，現実と虚構の逆転現象が見られる。すなわち現実（王が実はオロパストであるということ）が架空のこと（かなわぬ夢想）として位置づけられるのである。

Hésione : [...]
Changez, changez de nom, si vous me voulez plaire,
Fussiez-vous, Oropaste, à la place du Roi,
Je croirais cette ardeur moins honteuse pour moi :
Oropaste autrefois eut toute mon estime,
Et de pareils Héros peuvent m'aimer sans crime ;
Mais mon Frère lui-même...
le Roi : Ah! Princesse.
Hésione : Ah! Seigneur.
le Roi : Que ne suis-je Oropaste avec tant de bonheur!
Hésione : Ah! que ne pouvez-vous cesser d'être mon Frère!
le Roi : Peut-être que je suis cet Amant téméraire ;
Oui sans doute, Princesse...

Hésione : Ah! s'il est vrai, grands Dieux...

(*Oropaste*, IV,4, p.64-65)

エジオンヌ「[.....] 私の愛を手にいれようとお望みでしたらどうぞそのお名前をお捨てくださいませ。あなたが王トナクサールではなく，オロパストであるならば，あなたが私に対してお示しになっているこの愛も恥ずべきものであるとは思いはしますまい。かつて私はオロパストを憎からず思っておりましたし，彼ほどの英雄であれば私の相手として申し分なかったでしょう。でも私の兄その人が私を愛するとなると.....」

王「ああ姫君。」

エジオンヌ「ああ王様。」

王「おまえに愛されるという幸福が味わえるというのになぜ私はオロパストではないのであろう。」

エジオンヌ「ああなぜあなた様は私の兄なのでしょう。」

王「もしかすると私こそこの無鉄砲な恋人オロパストかもしれないが。そうだそうに違いない。」

エジオンヌ「ああそれが本当ならばどんなによいでしょう。」

(『オロパスト』四幕四場)

王がオロパストであってくれたならというエジオンヌのこの望みこそ，オロパストが本物のトナクサールとして自らを認めさせることに成功した証に他ならない。こうなるともう，オロパストの兄弟パティジットが王位についているのは偽者であると告発しても，この事実は保身のための嘘であると解釈されるばかりではない。この時に王がみせる動じぬ様子はエジオンヌをすっかり納得させるものであり，自分との結婚によって，王が本物であることの証明ができるのならば，とエジオンヌはあれほど忌避していた偽トナクサールとの結婚を承諾しさえするのである（四幕七場)。また，パティジットの裏切りに腹を立てた父親メガビーズは，パティジットに対して次のような台詞を聞かせるのである。

Mégabise : Perfide, ouvre les yeux, et reconnais ton Roi.
Tout ton Frère a péri par ta fureur extrême,
Et tu vois en ce lieu Tonaxare lui-même.

(*Oropaste*, V,2, p.80)

メガビーズ「この裏切り者め，目をしかと明けて見，王の姿を認めるがよい。かつてはおまえの兄弟であったオロパストはおまえの惑乱によって死んだのだ。今この場所にいるのはトナクサールその人なのだ。」(『オロパスト』五幕二場)

王が放つあまりの威厳にパティジットは身体の震えが止まらない（五幕二場)。偽者として王を

暗殺した者たちにとってさえ，王の威厳は本物のように思われたのである。

Zopire : Je ne sais que vous dire en un sort si confus :
Et ce qui sur ce point m'étonne davantage,
C'est qu'un fourbe soit mort avec tant de courage :
[...]
Le Roi, sans se troubler, soutient nos premiers coups,
Et d'un air animé d'orgueil et de courroux,
Comme il se voit surpris avec peu de défense,
Menace, et fait valoir la suprême Puissance.
[...]
On voit ses yeux briller d'une noble furie,
Qui fait presque trembler l'intrépide Darie,
[...]

(*Oropaste*, V,6, p.89)

ゾピール「これほどの混沌をきわめた事態についてどのようにご報告したものでしょうか。それに何よりの驚きは，あのペテン師があれほどの勇気を見せて死んだことなのです。[.....] 王は動じる様子もなく我々の最初の一撃を受けて立ちました。護衛の手薄な不意をつかれたことで怒りに身を任せ，誇りに満ちた様子で威嚇し，自らが最高権力者であることを示したのです。[.....] 王の目は高貴な怒りにらんらんと輝き，恐れを知らぬダリさえも震え上がらせたのです。[.....]」

(『オロパスト』五幕六場)

ボワイエの戯曲においては，結局最後の場面でオロパスト自身が自分が偽者であることを告白するまで他の登場人物の立場は揺れ動くのであり，トナクサールとして王位についている人物が本物かどうかという問題，そしてオロパストが自分をトナクサールとして認めさせていく過程，この二つがボワイエの作品の原動力となっているのである。

これに対してヴィルディユ夫人の物語における偽ドン・セバスティアンの前述の台詞は，すっかり飽きてしまったクセリーヌを置き去りにするための口実でしかない。

Il [le faux Dom Sébastien] était charmé de la beauté et de l'amour de cette Princesse : [...] et tant que la possession fut victorieuse du dégoût, Sébastien se trouva le plus heureux de tous les hommes ; mais sitôt que ce trouble-fête eut pris ses avantages, la négociation secrète de Portugal lui sembla trop lente, et il résolut d'aller en personne travailler à ses affaires.

(*Les Annales galantes*, p.489-490)

> [偽ドン・セバスティアン] は美しいクセリーヌ姫に愛されていることですっかり有頂天になっていた。[.....] だから姫を所有する喜びに代わって，[恋愛につきものの] うんざりした気持ちが現われてくるまでのあいだは，セバスティアンはこのうえもなく幸せであった。ところが [「飽き」という] この厄介者が姿を現わすや，ポルトガルで秘かに進められている交渉はあまりに遅々としたものに思えるのであった。そこで自ら現地に赴き，交渉に当ることを決意したのである。 (『恋の暦』)

情熱恋愛の末あっという間に冷めていくのはヴィルディユ夫人の小説においては，常に男の側であり，野心と恋愛を天秤にかける男はかならず野心のほうを選び取る。『オロパスト』がモデルを提供したような変装のテーマは，恋愛の情熱が死んだあとに男性が味わう倦怠 (dégoût) を描き出すための舞台装置としての装飾的な役割を振り当てられているといえよう。

ボワイエの戯曲とヴィルディユ夫人の物語は，一見したところでは似通ったテーマを取り扱っているように見えるが，実は重要な違いが存在する。偽ドン・セバスティアンがドン・セバスティアンの役を演じることで，本人になりすまそうと努める[6]のに対して，オロパストはトナクサールの役を演じているのではない。自分自身をトナクサールとして周囲の人々に認めさせようとするのである。かくしてかつての寵臣ダリは不興を買い，代わってそれまで冷遇されてきたパティジットが寵臣となる。トナクサールは婚約者アラマントを冷たくあしらい，実の妹エジオンヌに求愛する。この急激な態度の変化は家臣たちの疑惑を呼び起こすいっぽうで，これほどの大胆さこそまさに彼が本物のトナクサールである証であるとも捉えられるのである。偽トナクサールのとったこの態度こそ他の人物を二派に分かち，劇的緊張感を生み出すのである。ボワイエの戯曲においては，オロパストとトナクサールの身体的特徴の類似は「自然をも驚かす」ほどのものであり，オロパストはトナクサールの「外見的特徴のすべて——すなわち風貌，体つき，声」を持っているとされている。ところが，二人がこれほどまでに似ていることは周知の事実であるために，トナクサールとして王位についている人物についての疑念は晴れない[7]。事実，トナクサールが本物であるかどうかをめぐって揺れ動くエジオンヌの胸のうちこそこの戯曲全体の柱となっているといえよう。これに対して，ヴィルディユ夫人の小説においては，偽ドン・セバスティアンの身体的特徴は，彼が本当にポルトガル王であるかどうかという疑念を引き起こす性質のものではない。彼に会った人物は皆，彼が真のポルトガル王であることをはなから疑わないのである。王になり代わった人物が王と瓜二つであるという設定は，ボワイエの作品において真偽をめぐる葛藤を助長して，戯曲の構成上重要な役割を果たすのだが，ヴィルディユ夫人の物語においてはこの同じ設定は装飾的なものでしかない。つまり，「[二人が] 全くの瓜二つであることがこのお話のなかで最も不思議な点なのです。この男にはドン・セバスティアンの身体の隠れたところにあるあざまでそっくり同じ位置にあったのですから。[8]」というくだりからもうかがえるように，挿話的な興味の対象としかなりえないのである。すなわちヴィルディユ夫人の小説においては，変装のテーマが物語の展開上果たす役割はきわめて皮相的で装飾的なものにとどまっているのである。語りの部分を突然中断して，まるで舞台さながらの登場人物の対話を組み入れる手

法は，ヴィルディユ夫人の小説を特徴づける要素だが，数年前に一世を風靡した戯曲の一場面を彷彿とさせるようなシーンを組み込むことで読者の興味を一層引きつけ，ヴィルディユ夫人はこの物語に他の物語にはない奥行きを与えているのである。

確かに公妃は，ドン・セバスティアンが偽者であると議会に告発する。だがそれは自分を裏切った恋人に復讐するための行為なのであり，ドン・セバスティアンと名乗っている人物が本物かどうかという問題が提出されているわけではない。ここでは変装のテーマは二人の女性の愛し方の違いを浮き彫りにしているのである。

> [...] il est constant que ce Dom Sébastien demandait un Trône qui ne lui appartenait pas ; mais la Duchesse n'agissait point sur ce fondement : la jalousie seule lui inspirait le désir de se venger, et pour dernier motif de désespoir, elle trouva la Princesse de Maroc si belle, qu'elle ne put s'empêcher d'excuser en secret le crime qu'elle voulait punir. [...] La Princesse s'apperçut bien de tous ces mouvements. Je vois bien ce que c'est, Madame, disait-elle un jour à la Duchesse de Parme, vous ne voulez pas que Dom Sébastien soit le vrai Roi de Portugal, parce qu'il ne peut plus vous faire part de cette Couronne mais [...]
>
> (*Les Annales galantes*, p.508-509)
>
> 偽ドン・セバスティアンが要求している王冠は本来彼のものでないという事実は変わらない。だがパルム公妃はこの根拠に基づいて行動しているのではなかった。嫉妬心にかられて復讐しようと思ったのである。それにモロッコの姫［クセリーヌ］のあまりの美しさは，自分が罰しようとしているドン・セバスティアンの罪もなるほど仕方のないことであったのかと公妃をも内心納得させるほどのものであったのでなおさら，公妃はクセリーヌの美しさにうちのめされたのであった。[.....] クセリーヌ姫は公妃のこうした心の動きすべてを見て取って，ある日次のように公妃に語りかけた。「あなたがなぜドン・セバスティアンが本物のポルトガル王であって欲しくないと思っていらっしゃるのかお察しいたしますわ。ご自分が王妃としてポルトガルの王位に就くことができないことがご不満ですのね。でも［.....］ (『恋の暦』)

クセリーヌ姫は自分が公妃と同じ立場ならばどういう態度を取るかを公妃の前で披露する。

> Employez votre crédit pour lui faire rendre son Royaume, rétractez-vous de ce qu'un injuste ressentiment vous a fait avancer, et je consens que ce Prince tienne la parole qu'il vous avait autrefois donnée ; j'aime bien mieux le voir régner, et pouvoir me flatter en secret que me devant la vie et la Couronne, il m'aime plus dans le fond de son cœur, que celle qui veut les lui ravir, que de le posséder tranquillement, et de pouvoir craindre qu'entre mes bras, il ait sujet de regretter quelque chose.

(*ibid.*, p.509-510)

あなたのお力すべてを使ってあの人に王国を返してあげてください。あなたが味わっている怒りはいわれのないものなのですし，この怒りにかられてあの人を偽物だと告発したあの発言を取り消していただけるのでしたら，王がかつてあなたにした婚約の約束を履行するのに反対したりいたしません。私はあの人が王として君臨し，心の底では私のことを命の恩人として，また自分を王位につけてくれた人として愛してくれていればそれでいいのです。そのほうがあの人から命や王位を取り上げるよりどんなにいいでしょう。それにあの人を手にいれたとして，あの人が私の腕のなかで失った王冠について後悔しているかもしれないなどと思うのは耐えられないことです。

自分を裏切ったドン・セバスティアンを恋敵のまえで弁護するクセリーヌの思いは遠く離れた場所にいるドン・セバスティアンに届き，その心を動かす。

De sentiments si généreux étant portés par la voix publique jusques au Camp du faux Sébastien, rappelaient dans son cœur l'amour que son ambition avait étouffé.

(*ibid.*, p.510)

クセリーヌ姫のこの寛大さは人々の口に上り，やがて偽セバスティアンの陣営に伝えられた。そして野心に押し潰されていた愛がセバスティアンの心のなかに甦ったのである。

このように，目の前にいる相手を説得するために語った言葉（内容）が，直接の説得の対象として話者が想定している相手以外の人物の耳に入り，この予期せぬ聞き手の心を動かすという構図は，ヴィルディユ夫人の小説に見ることのできる演劇的手法の基礎をなすものである。第三者が隠れて他人の会話を盗み聞きすることで，そのときまで見えなかった真実に気づくという演劇的構図が敷衍され，クセリーヌ姫の真心が，距離的な隔たりを超越してドン・セバスティアンの心を揺さぶるのである。ここには，この時代特有の美意識が窺えないだろうか。すなわち，真実は直接的な方法では知ることができない。本来自分に向けられたものではない言葉のなかにこそ，隠された真実を知る手掛りが潜んでいるのだという考えがこの手法のなかに表われているのではなかろうか。

ヴィルディユ夫人の小説美学を何よりもよく反映しているのはこの物語の結末部分である。クセリーヌはドン・セバスティアンが偽者であることを知ったあとでもなおこの偽者を愛し続けるのである。ボワイエの戯曲においては，最後のシーンでのオロパストの告白によって，彼が偽トナクサールであることがはっきりした以上，偽者の王をエジオンヌが愛するはずはないことは明らかであることを考えれば，ヴィルディユ夫人の物語の結末の独自性がより鮮やかに浮かび上がってこよう。悲劇の登場人物であるエジオンヌ姫にとっては偽者の王を愛することなど考えられるはずもない。だが，悲劇よりも自由なジャンルである小説の主人公であるからこそクセリーヌ姫は偽ドン・セバスティアンを愛し続けることができるのである。

Ne vous accablez point d'un remords inutile, interrompit la généreuse Princesse, j'aimais la personne de Dom Sébastien plus que l'éclat dont elle était environnée : j'ai cru trouver cette personne en vous, et les charmes qui m'avaient touchée, n'ont rien perdu de leurs privilèges, pour n'être pas placés dans un Monarque. J'avoue que je ne les aurais pas remarqué dans un homme du commun, mon courage et ma naissance ne m'eussent permis d'arrêter les yeux que sur ce que je croyais un grand Roi. Mais enfin mon erreur me fut chère ; [...]

(*Les Annales galantes*, p.512-513)

「無用な後悔でご自分を責めるのはどうぞおやめください。」そう言って心優しき姫君は偽ドン・セバスティアンの言葉を遮った。「私が愛したのは，ドン・セバスティアンその人なのであって，その付帯物である栄光ではないのです。私はあなたがドン・セバスティアンであると思ったのですし，あなたがたとえポルトガル王でなくとも，あなたのうちに私が見出した魅力も，あなたが私にとってドン・セバスティアンであるという気持ちも変わることはないのです。確かに，もしもあなたのことをポルトガル王と思い込んでいなければ，私は王族の一員としての誇りに邪魔されて，王家の血をひく者でない男性を好きになったりしなかったでしょう。でも結局，私のこの思い違いこそ私にとって何より大切なのです。[.....]」 (『恋の暦』)

この物語の語り手が続けていうように，「クセリーヌ姫は偽ドン・セバスティアンを心の底から愛していたのです」(514頁)。ここにおいて，真と偽の立場が逆転する。クセリーヌ姫は偽者であることを承知でドン・セバスティアンを愛するというのである。瓜二つの主題と結び付いた変装のテーマは，本物とその偽者との対立を描きだす。偽者であるという烙印を押された者は，その存在理由を根底から揺さぶられる。だからこそ『アンフィトリョン』(1668年) においてソジばかりではなくアンフィトリョンまでもが，自分こそ本物のソジ，アンフィトリョンであることを証明しようと躍起になるのである。『オロパスト』においては，トナクサールとして君臨している人物が偽者であることが明らかになったところで，失われていた秩序が取り戻され，本物か偽者かをめぐって展開していた戯曲は終結する。ところがヴィルディユ夫人の物語においては，偽者のほうに本物よりも高い価値を与えると解釈することさえ可能なこの結末によって，従来このテーマが戯曲の枠のうちで受けてきた扱いに180度の転換が見られたのである。偽者としてその存在理由が否定されるのではなく，偽者であるとしてもなお相手が愛しい存在であることに変わりはないのである。真実は第三者の目を通してしか知ることができないとする醒めた意識と並んで，何よりもまず自らの目と心を信じるクセリーヌのこの台詞が見られることは実に興味深い。情熱恋愛が冷めていくのは止められないにしても，離れていった相手の気持ちを再び取り戻す可能性を示唆して終わるこの物語の結末は，楽観的悲観主義と呼んでもよいようなヴィルディユ夫人独自の小説美学を映しだしているといえないだろうか。

ヴィルディユ夫人は，本物と偽者の対立を軸とした当時流行の戯曲のテーマを取り入れて読者の興味をかきたてただけではない。当時の演劇において瓜二つのテーマが偽者の価値を認めないことはいわば暗黙の了解事項であったのに対して，夫人は偽者の復権を図ることで，女性の側のひたむきな愛のかたちをまたひとつ書き加えたのである。

注

1) Georges Forestier, *Esthétique de l'identité dans le théâtre français (1550-1680). Le Déguisement et ses avatars*, Genève, Droz, 1988, p.11, "Que l'apparence soit affectée ou non, que le personnage déguisé soit conscient d'être autre que ce qu'il paraît ou qu'il soit le premier trompé par son identité fictive, on parlera de déguisement dans tous les cas d'interruption momentanée de l'identité relayée par l'imposition d'une identité usurpée."

2) トマ・コルネイユの『ティモクラート』とボワイエの『オロパスト』を評してフォレスティエは次のように述べている。"deux des tragédies à déguisement les plus importantes du XVIIe siècle" (*ibid.*, p.267)

3) フォレスティエ，前掲書，486頁，注16。

4) フォレスティエ，同書，144頁，"Les rares échecs des déguisements des héros"。

5) ボワイエ『オロパスト』のテクストについてはすべて，パリ国立図書館所蔵の台本（Yf 4853）によるものである。なお綴りの現代化を図った。

6) "Il fait de son mieux pour en [du Roi de Portugal] jouer le personnage" (*Les Annales galantes*, p.487).

7) Darie : [...]
Vous voyez [...]
[...]
Et que d'un Roi si cher dont il porte l'image,
Il n'en a retenu que l'ombre, et le visage.
Hésione : C'est assez, et c'est trop d'en avoir à la fois
Tous les traits apparents, l'air, la taille, et la voix.
Darie : De si contraires mœurs font voir son imposture.
Hésione : Mais des traits si pareils étonnent la Nature.

(*Oropaste*, I,3, p.13)

8) "On ne voit rien de plus surprenant dans toutes les Histoires, que la perfection de cette ressemblance. Elle s'étendait jusques aux marques naturelles, que Dom Sébastien avait en quelques endroits du corps."(*ibid.*, p.488)